北海道本島におけるオホーツク文化期のイヌ
―モヨロ貝塚の貝層出土資料を中心に―

内　山　幸　子*　　梅　田　広　大**

Dogs of the Okhotsk Period on the Main Island of Hokkaido
―Dog remains from the shell layer of Moyoro Shell Midden, Abashiri―

Sachiko UCHIYAMA, Koudai UMEDA

Abstract

It is known that many dogs were used during the Okhotsk period. However, this view is based on research centered on the sites located on islands such as Rebun and Rishiri, and less is known about the use of dogs during the Okhotsk period on the main island of Hokkaido. In this paper, the authors examined dog remains in the middle stage of the Okhotsk period excavated from the shell layer of Moyoro shell midden, Abashiri, and found that many young dogs were used as food. On the main island side, where hounds were thought to be necessary, the present study found that the use of dogs was similar to that of the smaller islands. The results of this research helps to shed light on the roles of dogs and hunting methods during this period.

はじめに

オホーツク文化は、海獣狩猟文化との別名もあるように、海への依存度が高い文化として知られる。確かに、同文化圏内で海獣狩猟と漁労が盛んに行われていたことは、遺跡から出土した動物遺体の内容からも明らかであり、サハリンから北海道、千島列島にかけての海岸沿いにおもに遺跡が分布した状況を鑑みても、オホーツク文化と海との関わりの深さは誰もが認めるところである。

このように海に依存した暮らしを主とする一方で、イヌを若い段階で食べるという、日本史上でみてもきわめて特異なイヌ利用が行われていたことは、筆者を含めた多くの研究からすでに明らかとなっている（内山 2015他）。ただし、このようなイヌの利用については、イヌの出土量がきわめて多い礼文島や利尻島での分析結果に負うところが大きく、それ以外の地域にもあてはまるのかという疑問は残ったままであった。つまり、礼文島や利尻島は面積の限られた

*国際文化学部デザイン文化学科、**網走市立郷土博物館

島嶼であるが故に、陸生哺乳類の少なさから猟犬としてのイヌが活躍する余地があまりなく、海が荒れて島から出られない時の非常食的な役目をイヌが担い得るために、イヌの食用化がより顕著に表れたとみることができる。事実、これまでオホーツク文化期と特定できるイヌが多く出土している遺跡は、道内では礼文島・利尻島に集中し（香深井１遺跡（大場・大井編 1976・1981）、香深井６遺跡（北海道礼文町教育委員会 2001）、浜中２遺跡（西本編 2000、前田・山浦編 2002）、種屯内遺跡（前田・西谷編 1997）、利尻富士町役場遺跡（北海道利尻富士町教育委員会 1995・2011））、それ以外の地域ではサハリン南部のススヤ貝塚（清野 1925、馬場 1940、伊東 1942）や、同中部のプロムィスロヴォエ２遺跡（内山 2002）を除いてほとんど確認されていない[1]。

このような状況のなか、2003～2008年度にかけて行われた保存整備事業に伴う網走市モヨロ貝塚（米村・梅田 2009）（図１）の発掘調査で、オホーツク文化期中期にあたる刻文期の貝層から、礼文島や利尻島ほどではないにせよ、比較的多くのイヌが出土したことは注目に値する。同遺跡では、かつてもイヌが多く出土したと報告されたことがあるが（直良 1973）、戦前の調査であったこともあり、イヌをはじめとする動物遺体の正確な所属時期が不明確で、動物利用に対して積極的に検討し難い状況にあった。しかし、近年の調査で所属時期の明らかな資料が得られたことにより、オホーツク文化期のイヌについて検討できる環境が整った。



図１　モヨロ貝塚の位置（S＝1/80,000）（米村・梅田 2009）

本稿では、詳細が未報告であったモヨロ貝塚の貝層から出土したイヌについて概観した上で、これまで同文化圏内で出土したイヌ資料と比較しながら、オホーツク文化期のイヌの形態的特徴や利用内容について検討するとともに、当時のイヌの位置づけを探ることとした。

１．モヨロ貝塚の貝層出土のイヌ

10号竪穴住居跡の西側の発掘区内に堆積していた貝層（Ｖ層：刻文期）が発掘調査されたのは、2004、2005年度であり、この貝層からは、土器や石器とともに貝殻をはじめとする多量の動物遺体が出土した。動物遺体については発掘調査報告書（米村・梅田 2009）の刊行までに同定作業が未了であったため、イヌについては陸生哺乳類の中では多いことや出土部位が全身に及ぶこと、成獣とともに幼獣が含まれることが記載されるにとどまった。

なお、貝層とは別地点で検出された、魚骨層と住居内骨塚出土のイヌ（前者は貼付文期以降から現代まで、後者は貼付文期）についてはすでに全量が分析され、報告されている（西本・梅田 2009、佐藤 2009）。このうち、骨塚出土のイヌ資料は出土量が僅かであるが、頭蓋骨３点等が出土した魚骨層出土資料は比較的分量がある。しかし、現代のニワトリとみられる資料が混じる等、全てをオホーツク文化期とは断定し得ないため、本稿の検討では参考程度にとどめた。

(1) 出土量

本稿で分析対象とした貝層（Ⅴ層）は最厚部で70cmほどあり、分層して資料が取り上げられた箇所もあった。このため、イヌの出土層位もⅤ層と一括されたものだけでなく、上から順にⅤa層、Ⅴc層、Ⅴd層、Ⅴe層がみられた。しかし、所属時期や出土遺物の内容に大きな違いがあるわけではないため、本稿ではその全てをまとめて報告することとした。

貝層から、イヌが解剖学的位置を保って出土した例はなく、いずれも散乱状態であった。イヌの出土内容は、文末に挙げた表１に示した通りである。

もっとも多く出土した左上顎骨と右上腕骨では、最小12個体が確認された。25m^{2}にも満たない発掘区内では比較的多い出土量といえる。この貝層は発掘区外にも広がっており、今回認めた以上のイヌが実際には含まれていた可能性が高い。

(2) 年齢構成

年齢構成は、最小12個体と他の部位に比べて多く出土した左上顎骨と右上腕骨でそれぞれ算出した。ここで注意しなければならないのは、歯の生え変わりにもとづく年齢査定法と、関節の癒合や骨の成長度合いにもとづく上腕骨をはじめとする四肢骨での年齢査定法は一致しない部分が多いという点である。具体的に言えば、上腕骨で成獣の指標となる両関節の癒合時期は、上顎骨で永久歯に全て生え変わり成獣と判断される時期よりも４ヶ月ほど遅れる[2]。また、四肢骨だけで見ても、上腕骨と大腿骨の関節癒合時期は一致しないというように、どの部位で算出された年齢構成であるのかを注視する必要がある。遺跡では上顎骨や下顎骨の遺存率が概して高いが、上腕骨をはじめとする四肢骨で算出される例もあるため、本稿では、同数出土した上顎骨と上腕骨による結果をともに示しておく。

上顎骨では、歯の生え変わり状況にもとづいて詳細な年齢査定が可能である。最小12個体のうち、全歯が永久歯に生え変わった成獣は８個体（約66.7%）、乳歯から永久歯への生え変わり途中の亜成獣は１個体（約8.3%）、乳歯のみの幼獣は３個体（25.0%）であった。

一方、同じく最小12個体が確認された右上腕骨では、近位部・遠位部の関節が癒合していたために成獣とみなした個体が４個体（約33.3%）、関節が未癒合で大きさ的に亜成獣に該当するとみられる個体が２個体（約16.7%）、関節が未癒合かつ形態的にかなり小さく幼獣とみられる個体が６個体（50.0%）という比率になった。

両データを比較してみると、上顎骨で成獣の比率が30%以上高いが、これは前述した部位ご

との年齢査定基準の違いによるものである。事実、上顎骨で成獣とされた８個体のうち５個体では、歯の咬耗が全くもしくはほとんど確認できず、咬耗が少しだけみられた個体が２個体、咬耗が明確な個体は１個体しかなかった。このため、上顎骨で成獣とした個体のほとんどは永久歯に生え変わってからそれほど時間が経過していない個体であった可能性が高い。このような歯の咬耗の程度が少ない上顎骨を持つ個体のなかには、上腕骨の関節が未癒合の個体も含まれることが十分に考えられる。このため、本遺跡のイヌの年齢構成は、部位ごとに異なるように一見見えるものの、上腕骨以外の部位の関節癒合状況からしても、年老いた個体はほとんどみられず、比較的若い個体に偏ることが明らかである。

(3) 病変・失歯

上顎骨１点と下顎骨４点（下顎骨のうち２点は同一個体（№⑤個体）の左右）で、骨体部に歯槽膿漏とみられる痕跡が確認された。全て成獣個体であるが、同一個体の下顎骨２点以外はいずれも歯の咬耗度が低く、年老いた個体ではないようである。同一個体の下顎骨は歯槽膿漏により右側では切歯部から第一前臼歯部まで、左側では第二前臼歯部が埋まっており、症状はかなり重い。

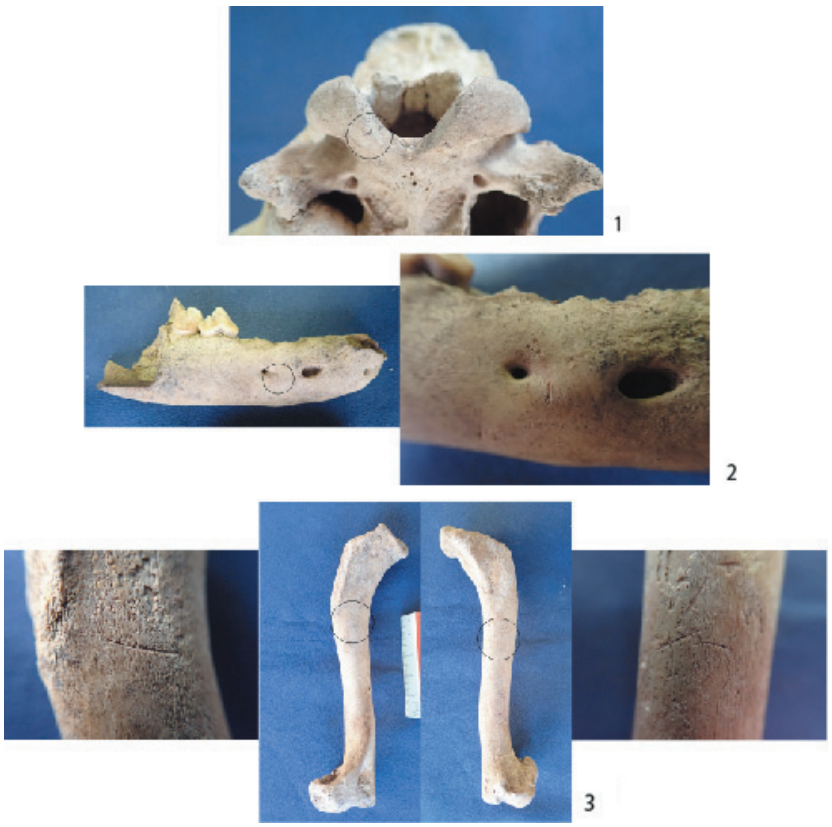

写真１　傷

また、病気によるものかは定かでないが、左脛骨と右下顎骨各１点で、骨体の膨らみが確認されている。

さらに、上顎骨４点で第二切歯や第一前臼歯、第二前臼歯、下顎骨４点で第一前臼歯や第二前臼歯、第三後臼歯の歯槽部を欠いた例も見られた。

(4) 傷

頭蓋骨の後部（後頭顆）左側に傷が確認された（写真1－1）。人為的なものだとすると、頭蓋骨を体幹部から外す際についたものかもしれない。頭部としては他にも、右下顎骨の頬側で傷が見られた（写真1－2）。さらに、左上腕骨でも骨体部に数箇所の傷が確認された（写真1－3）。

２．モヨロ貝塚出土イヌの利用内容

すでに記した通り、モヨロ貝塚の貝層から出土したイヌは、若い個体に偏ることが明らかであった。成獣とした資料でも、歯の咬耗度が高い資料は１個体しかなく、大半は生後数ヶ月から１年程度で死亡した個体であったと推測される。このような年齢構成は不自然で、遺体が散乱した状態で出土したことや、少ないながらも骨に傷が確認されている点からすれば、人が意図的にイヌを殺した可能性が考えられる。

散乱した出土状況から、イヌは死後に解体されたと推測されるが、解体を伴う使途としては食用にされた可能性がもっとも高い。さらに、１点のみの確認例ではあるが、下顎骨の頬側という、肉のほとんどない箇所で確認された傷（写真1－2）からすると、鼻先近くで毛皮が剥がれたことも推測される。

３．モヨロ貝塚出土イヌの形態的特徴

貝層から出土したイヌのうち、成獣個体で全長の計測が可能な資料は全て計測し、その結果を文末に挙げた表２に示した。表からも明らかな通り、部位ごとの大きさにはかなりの幅があり、大きさの面ではヴァラエティに富んでいたことをうかがわせる。表には計測値にもとづいた推定体高（(1)は山内 1958、(2)は西中川他 2008による）も合わせて記している[3]。これを見ると、部位によって、また用いた体高推定式によって値はかなりばらつき（図２）、45cm前後の値を中心としながらも、38cm台から50cmに達する個体まで、10cm以上もの差がある。上腕骨に絞ってみても、推定体高(1)で差が6.4cm、推定体高(2)では差

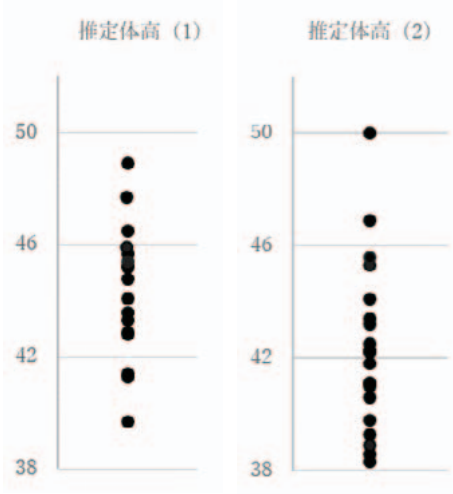

図２　推定体高構成

が10.7cmと、同一部位でも大きな差が生じていることが分かる。

形態の分かる成獣の頭蓋骨はそれほど多くないが、口吻部が太く短い、いわゆるＡ型タイプのイヌ（図３）が主体であった。

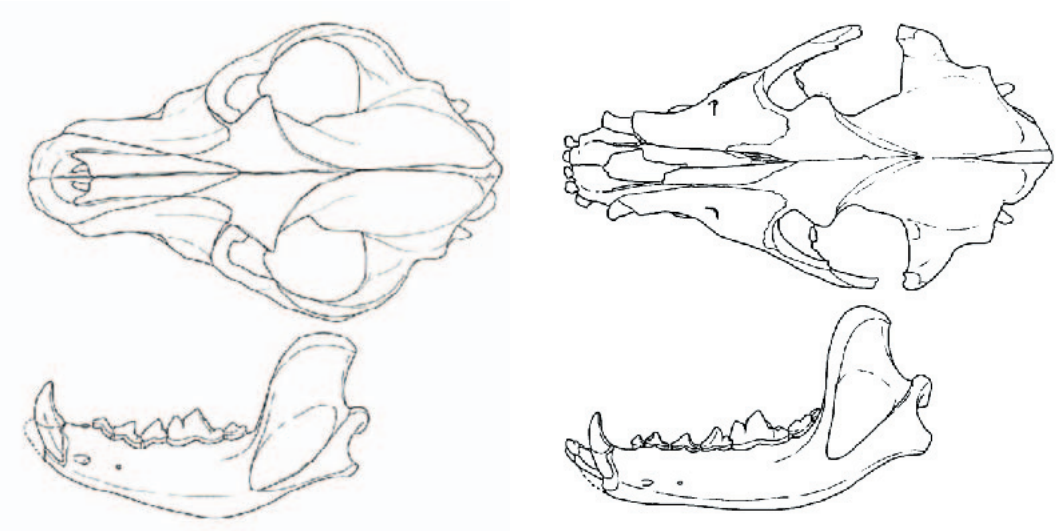

図３　Ａ型（左）とＢ型（右）の典型例（大場・大井編 1981）

４．他のオホーツク文化期の出土イヌとの比較

(1) 利用内容

前述したとおり、オホーツク文化期中期である刻文期（貝層部分）のモヨロ貝塚では、比較的若い個体を対象とした肉と毛皮の採取が行われていた可能性が高い。このような利用は、礼文島・利尻島を中心とするオホーツク文化期の遺跡で見られる内容と共通している。しかし、イヌ以外の動物に目を転じれば、島嶼という環境から選択の余地なく海の資源に強く依存せざるを得なかった礼文島や利尻島とは異なり、北海道本島に位置するモヨロ貝塚は海に面しながら陸生動物も十分に利用できる環境にあった。実際に、貝層からは出土内容の詳細は未報告であるが、ヒグマやエゾシカ、キツネなどの出土が報告されている（山田・梅田 2009）。このうち、特にヒグマのような大形で猟者の危険性がきわめて高い獲物を捕獲する際には、本来猟犬を利用した方が、危険度が下がるだけでなく、獲物の発見や追跡、さらには猟の成功率にも好影響を与えることが容易に想像される。このような視点に立てば、島嶼と共通したイヌの利用方法であっても、その意味するところは大きく異なってくる。すなわち、オホーツク文化期には、島嶼で猟犬としてのイヌが必ずしも必要でないためにイヌの食用化（毛皮利用を含む）が顕在化した礼文島や利尻島のような地域だけでなく、猟犬が本来必要と考えられるような地域でもイヌを食用にすることがあったとみなせるのである。もちろん、モヨロ貝塚でも１点だけ歯の咬耗が激しい成獣個体がみられたため、猟犬をまったく使用していなかったとは言い切れ

ない。しかし、イヌを猟犬としてよく利用したとされる縄文時代に比べれば、その扱いの差は歴然であり、猟犬にされた可能性のある個体でさえ、死後に埋葬されることなく、他のイヌと何ら変わらない処置（すなわち肉や毛皮を採取した後の遺棄）がなされたことは、散乱した出土状況からも見て取れる。

なお、貝層出土の動物遺体のなかには、キツネなどの中小形獣で頭部に穿孔が施されたり、ヒグマでは被熱したりした資料もみられたが（山田・梅田 2009）、イヌにはそのような痕跡はまったくみられない。これは、時期は下るが、貼付浮文期に属する資料を含む魚骨層でも同様である（西本・梅田 2009）。本遺跡では、屋内で動物を祀った跡である貼付浮文期の住居内骨塚で僅かとはいえイヌが出土しているため（佐藤 2009）、儀礼にイヌがまったく関与しなかったとは言えないが、他の遺跡と同様、儀礼的扱いを受ける中心はあくまでも野生獣であり、イヌが多く出土したモヨロ貝塚でも、飼育動物であるイヌは基本的にその対象外であったことを示している。

(2) 形態的特徴

前項で、出土したイヌのうち成獣個体の計測値を記し、モヨロ貝塚から出土したイヌが大きさ的にヴァラエティに富んでいたことを示した。オホーツク文化期では、イヌの大形化が注目されがちであるが、他の遺跡でも大形から小形の個体が確認されており、モヨロ貝塚でも同様の傾向であったことが分かる。

写真２は、本遺跡から出土した上腕骨を示したものである（左から、全長159.3mm、146.8mm、137.5mm、127.0mm）。これら資料の比較からも、当時のイヌの形態に大きな差があったことは一目瞭然である。これまでは、頭部（頭蓋骨・下顎骨）の形態に注目が集中しがちであったが、頭部のうち特に内部が空洞である頭蓋骨は破損しやすいこともあり、頭部に加えて四肢骨の形態にも注目していくべき時期に来ている。残念ながらこれまで四肢骨の計測値が報告された例は少ないが、今後は、これらの値も報告書や論文等で提示し、計測値の蓄積を図っていく必要がある。



写真２　上腕骨に見る形態の多様性

おわりに　―モヨロ貝塚のイヌの位置づけ―

本稿では、これまで出土例の少なかった北海道本島でのオホーツク文化期のイヌについて明

らかにすべく、モヨロ貝塚の貝層から出土した刻文期のイヌの分析を行った。その結果、これまでおもに礼文島や利尻島といった島嶼で出土した資料をもとに推測されていたイヌの利用内容や形態的特徴と共通した様相をモヨロ貝塚でも見出すことができた。しかし、前述したように、特にイヌの利用内容については、猟犬としてのイヌの活躍の場がほとんどなかった島嶼と、ヒグマやエゾシカといった陸生哺乳類の狩猟を盛んに行っていた北海道本島のモヨロ貝塚とでは、その意味するところは大きく異なり、猟犬が必要とされるような地域でも島嶼と変わらず食用（毛皮利用も含む）としてイヌが若い段階で利用されていたことは注目される。これは、イヌの利用内容や位置づけのみならず、オホーツク文化期における陸上狩猟の方法や技術について今後詳しく検討していく上でも考慮すべき重要な要素である。

オホーツク文化期には、動物遺体が動物儀礼の場である住居内骨塚から出土することが多く、儀礼に原則関与しない飼育動物であるイヌは、出土量が限られる傾向にある。今後もこのような状況は続くとみられるが、今回分析したモヨロ貝塚出土資料のように、住居外も含めた集落全体を対象とした発掘調査が少しずつでも進むことにより、不明な点が多く残る北海道本島でのイヌ利用史の空白が埋まることを期待したい。

特にイヌは、飼育動物として人と近しい存在であるため、儀礼の対象となった野生動物の分析から推測できることとは異なる、当時の別の様相を我々に示してくれるはずである。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、検討対象としたモヨロ貝塚の調査担当者であり、資料を保管している網走市立郷土博物館の館長でもある米村衛氏には、資料の閲覧および公表を快く許可していただいた。深謝の意を表します。

注

1　動物遺体の情報をほとんど欠く千島列島を除く。

2　歯の生え変わりによる年齢査定法（森 1930）では生後８か月程度以上を成獣とするのに対し、上腕骨の関節が癒合する時期は近位部で１歳、遠位部で６～８ヶ月とされる（Cornwall 1956）。

3　西中川他（2008）の方法では、遺跡出土資料によくみられる非完形資料から全長を推定する式も提示されている。これを用いれば、非完形骨からも体高推定が可能になるが、完形骨と非完形骨の値を混ぜることは混乱をきたすため、本稿では、完形で出土した骨の全長のみを用いて体高推定を行った。

引用文献

伊東信雄　1942「樺太先史時代土器編年試論」『喜田博士追悼記念國試論集』大東書館　19～44頁
内山幸子　2002「サハリン中部におけるオホーツク文化後葉の動物利用について」『筑波大学先史学・考古学研究』13　17～33頁
内山幸子　2015『イヌの考古学』同成社
大場利夫・大井晴男編　1976『香深井Ａ遺跡上』東京大学出版会

大場利夫・大井晴男編　1981『香深井Ａ遺跡下』東京大学出版会
清野謙次　1925「樺太アイノに関する人類学的探求紀行」『日本原人の研究』岡書院　215～260頁
斎藤弘吉　1963『犬科動物骨格計測法』私版
佐藤孝雄　2009「３骨塚から検出された鳥獣遺体」『史跡最寄貝塚』377～412頁
直良信夫　1973「５オホーツク海沿岸地域の北海道古代家犬骨」『古代遺跡発掘の家畜遺体』日本中央競馬会弘済会　170～178頁
西中川駿他　2008「イヌの骨計測値から骨長ならびに体高の推定法」『動物考古学』25　１～11頁
西本豊弘編　2000『浜中２遺跡発掘調査報告』（国立歴史民俗博物館研究報告85）
西本豊弘・梅田広大　2009「18号竪穴住居跡魚骨層出土の動物遺体について」『史跡最寄貝塚』353～372頁
馬場　脩「樺太の考古学的概観」『人類学・先史学講座』17　雄山閣　１～119頁
北海道利尻富士町教育委員会　1995『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』
北海道利尻富士町教育委員会　2011『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
北海道礼文町教育委員会　2001『香深井６遺跡発掘調査報告書1998・1999』
前田　潮・西谷榮治編　1997「利尻町種屯内遺跡発掘調査報告」『利尻研究』16　29～60頁
前田　潮・山浦　清編　2002「礼文島浜中２遺跡第２～４次発掘調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』13　35～87頁
森　1930「本邦産雑種犬ニ於ケル歯牙形態及ビ其の二代歯列発生ノ時期ニ就テ」『日本歯科学会誌』23　227～256頁
山内忠平　1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学術報告』７　125～131頁
山田訓二・梅田広大　2009「動物依存体」『史跡最寄貝塚』293～294頁
米村　衛・梅田広大　2009『史跡最寄貝塚』
Cornwall,I. W. 1956 Estimation of Age, Sex & Stature from Bones. *Bones for the Archaeologist*. Phoenix. pp. 218−237
Driesch, A. von den. 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*. Peabody Museum Bulletin, 1.

表１－１　貝層（Ｖ層）出土のイヌ(1)

頭蓋骨	下顎骨
頭蓋骨（切歯骨LR・頬骨R・鼻骨LR欠）成　傷・膿漏	L（×m_{23}×）幼(3ヶ月)
L（××P^{234}××）	L（××P_{234}××）成　M_3歯槽なし
R（××$P^{234}M^{12}$）	L（×××C×$P_{34}M_{12}$×）成　P_2歯槽なし
頭蓋骨（切歯骨L・前上顎骨L・頬骨LR・前頭骨一部L欠）成	L（×I_{23}C×$P_{234}M_{123}$）若(6～7ヶ月)　②
R（×××××P^2×P^4M^1×）	L（cm_{234}）幼(5週間)　③
頭蓋骨（頬骨R欠）成	L（×××××××P_4M_1××）若(5～6ヶ月)
L（×××××××P^4M^1×）	L（×××$CP_{34}M_{123}$）成　P_{12}部歯槽なし
R（×××××$P^{234}M^1$×）	L（×I_2×$CP_{1234}M_{12}$）若～成(7～8ヶ月)　④
頭蓋骨（頬骨LR欠）成	L（IP_{234}×××）成(老)　先端部・P_2膿漏　⑤
L（×××××$P^{234}M^1$×）	L（××××××$P_{34}M_1$）成?
R（×××××P^{234}××）P^1歯槽なし	R（I_3××$m_{234}M_1$）若(4ヶ月)
頭蓋骨（頬骨R欠）成	R（×××××××P_4M_1）若(5～6ヶ月)　傷
L（$I^1I^3CP^{34}M^{12}$）I^2P^{12}歯槽なし	R（×I_2×C×P_{34}×××）成　P_2歯槽なし・膿漏
R（I^{123}×$P^{1234}M^{12}$）	R（××I_3C×××P_4M_1××）成
頭蓋骨 成	R（C$P_{1234}M_{12}$×）若(6～7ヶ月)　②
L（××××P^2×P^4×M^2）P^1歯槽なし	R（××××m_{234}）幼(5週間)　③
R（××××P^2×P^4×M^2）P^1歯槽なし	R（m_{234}）幼(3ヶ月)
頭蓋骨（前頭骨R）幼?若?	R（M_{12}×）成　膨らみ
頭蓋骨（前頭骨一部・頭頂骨・涙骨・側頭骨・鼓室部L）若	R（$I_{123}CP_{1234}M_{12}$×）若～成(7～8ヶ月)　④
頭蓋骨（前頭骨後部より後方）若?成?	R（×$P_{34}M_{12}$×）成(老)　前半部膿漏　⑤
頭蓋骨（鼻骨L）	遊離下顎歯 I_1 R 1
頭蓋骨（頬骨R）２	遊離下顎歯 C L 2
頭蓋骨（頭頂骨L）幼	遊離下顎歯 M_1 L 1
頭蓋骨（頭頂骨・後頭骨）若	
頭蓋骨（後頭骨）若?成?	
頭蓋骨（鼓室部・側頭骨一部L）若?成?	
頭蓋骨（鼓室部含め周辺L）若	
切歯骨 L（××I^3）若(6ヶ月)	
切歯骨 L I^1～I^3部	
上顎骨 L（C×$P^2m^3P^4M^1$×）若(5ヶ月)	
上顎骨 L（××××P^4××）成	
上顎骨 L（C×$P^{34}M^{12}$）成	
上顎骨 L（m^{34}）幼(3ヶ月)	
上顎骨 L（m^{234}）幼(3ヶ月)	
上顎骨 L（×P^4）成	
上顎骨 L（m^{234}）幼(3ヶ月)　①	
上顎骨 R（P^4M^1×）成	
上顎骨 R（C×m^3P^4）若(5ヶ月)	
上顎骨 R（P^4M^1×）成	
上顎骨 R（×m^{34}）幼(3ヶ月)　①	
上顎骨 R（m^{234}）若(3～4ヶ月)	
遊離上顎歯 I R 1	
遊離上顎歯 C L 2　R 1	
遊離上顎歯 P^4 L 1	
遊離上顎歯 M^1 L 1　R 1	

凡例　（　）は骨体があることを示し、×は脱落した歯を示す
　　Ｉ：切歯、Ｃ：犬歯、Ｐ：前臼歯、Ｍ：後臼歯（Ｉ、ｃ、ｍは乳歯）、数字は歯の順番で下線は萌出途中であることを示す
　　Ｌ：左、Ｒ：右
　　幼：幼獣、若：亜成獣、成：成獣
　　Ｐ：近位端、ｄ：遠位端、ｍ：中間部　（ｐ・ｄ・ｍの記載のないものは完存）
　　○数字：同一個体

表１－２　貝層（Ｖ層）出土のイヌ(2)

肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨
L d欠	L p欠　幼	R p　成	L p-m　成	R Ⅱ 成
L 成	L p　成	R p-m　成	L m　若?成?	R Ⅲ 成
L 成	L 成	R p-m　成	R m　成	
L 成 p欠	L 若　傷	R 成	R p-m　成	
L 成	L 若	R m　成	R m　若?成?	
R 成	L 幼　⑥	R m　成	R m　成	
	R d一部欠　若	R p-m　若	R 成	
	R 若	R m　若?成?		
	R m-d　幼	R m　成		
	R m　幼	R p-m　成		
	R 幼	R 成		
	R 成			
	R 成			
	R 成			
	R m-d　幼			
	R d　幼			
	R 幼　⑥			
	R 成			

寛骨	大腿骨	脛骨	距骨
L 成	R 成	L p-m　成	R 成
L 成	R m-d　若	L m　成?　膨らみ	
L 成	R p-m　成	L p-m　幼	
L 成	R 成	L m　若?	
R 成	R p一部欠　成	R m　若?成?	
		R m　若	
		R p-m　若	
		R p-m　若	
		R p-m　若	
		R p一部欠　成	

椎骨	肋骨	その他
環椎　4	6	陰茎骨
軸椎　4		
頸椎　13		
胸椎　17		
腰椎　4		
椎頭･椎窩　5		

凡例　Ｌ：左、Ｒ：右
幼：幼獣、若：亜成獣、成：成獣
Ｐ：近位端、ｄ：遠位端、ｍ：中間部　（ｐ・ｄ・ｍの記載のないものは完存）
〇数字：同一個体

表２－１　計測値と推定体高(1)

頭蓋骨	11406	22085	21953	11135	11203	貝層剝取資料
最大頭蓋長　P-I	-	-	163.9	170.4	185.4	*
基底頭蓋長（1）　P-B	-	-	146.7	152.0	*	140±
顔長（1）　P-N	-	-	79.4	84.8	92.4	*
脳頭蓋長（1）　N-I	105.4	-	90.0	90.9	102.0	*
冠状縫合より門歯縁までの距離　P-Br	-	-	-	128.3	133.6	*
外後頭結節端より冠状縫合までの距離　Br-I	55.6	50.9	-	51.5	65.3	*
吻長（1）　P-Oo	-	R半（77.0）	68.1	71.6	78.1	*
後頭孔顆間切痕より冠状縫合頂点までの距離　Br-B	75.8	66.0	-	67.5	*	*
頬骨最大幅　Zy-Zy	L半（55.0）	-	L半（56.3）	-	109±	L半（43.5±）
両前頭顆突起端間距離　Ect-Ect	L半（30.1）	R半（20.3）	R半（25.6）	48.0	53.9	*
吻幅（1）　7-7	45.2	R半（19.2）	38.3	36.0	-	33.8
最小前頭幅　Fs-Fs	39.4	28.0	36.4	33.3	35.7	*
頭蓋幅（2）　Au-Au	L半（37.0）	58.9	64.1	60.7	65.4	*
頭蓋幅（1）　Eu-Eu	58.2	52.6	60.2	54.7	57.4	*
両眼窩最小距離　Ent-Ent	39.5	-	-	32.6	36.2	*
硬口蓋最大長　P-St	-	89.2	81.8	83.4	*	78±
上顎歯槽縁最大幅　67-67	73.1	R半（29.8）	62.6	58.3	63.4	56.1
推定体高(1)	-	-	44.1	45.7	48.9	-
推定体高(2)	-	-	39.8	41.8	46.9	-

下顎骨	4078	11557	4025	11557	21978	4034	4026
L/R	L	L	L	R	R	R	R
下顎骨全長（2）　id-Cm	128.8±	119.2	131.1	126.5	126.3	-	-
下顎骨全長（1）　id-goc	127.4±	-	-	127.6	126.6	-	-
下顎体高（6）　P_2-P_3中間高	21.1	18.2	20.0	18.9	19.6	-	21.2
下顎体厚（2）　P_2-P_3中間厚	11.0	10.5	11.9	11.2	11.0	-	10.3
下顎体高（3）　M_1中央高	27.9	25.6	29.7	26.4	26.8	28.9	30.0
下顎体厚（1）　M_1中央厚	13.1	11.6	12.6	11.8	11.5	13.7	11.8
推定体高(1)	45.9±	42.9	46.5	45.2	45.2	-	-
推定体高(2)	45.3±	38.3	43.2	41.1	41.1	-	-

上腕骨	4091	4268	4072	4072	4072
L/R	L	L	R	R	R
全長　GLI	-	137.5	159.3	146.8	127.0
近位端幅　Bp	32.2	29.1	-	29.6	22.2
近位端厚　Dp	39.9	37.3	39.8	49.0	32.9
遠位端幅　Bd	-	-	35.3	32.5	28.6
遠位端厚　Dd	-	-	26.0	24.4	21.1
推定体高(1)	-	43.6	47.7	45.4	41.3
推定体高(2)	-	42.5	50.0	45.6	39.3

橈骨	4062	4072	4222	4072	4078	4018
L/R	R	R	R	R	R	R
全長　GL	-	-	-	133.5	119.3	-
近位端幅　Bp	18.6	19.2	19.9	15.6	15.2	18.6
遠位端幅　Bd	-	21.3	-	-	-	-
推定体高(1)	-	-	-	43.3	39.7	-
推定体高(2)	-	-	-	42.3	38.6	-

凡例　頭蓋骨・下顎骨の計測位置は斎藤（1963）、その他はDriesch（1976）参照
計測値の単位は全てmm
推定体高(1)は山内（1958）のⅢ式にもとづく（cm）
推定体高(2)は西中川他（2008）の二次回帰式にもとづく（cm）
- は破損により計測不能
＊は展示資料のため計測不能

表２－２　計測値と推定体高(2)

尺骨	4025
L/R	R
全長　GL	166.4
推定体高(1)	44.8
推定体高(2)	44.1

中手骨Ⅱ	4078
L/R	R
全長　GL	50.2
推定体高(1)	-
推定体高(2)	41.0

中手骨Ⅲ	4025
L/R	R
全長　GL	57.3
推定体高(1)	-
推定体高(2)	43.4

大腿骨	4055	4026	4034
L/R	R	R	R
全長　GL	136.0	-	141.9
近位端幅　Bp	31.8	35.8	-
遠位端幅　Bd	25.0	-	-
推定体高(1)	41.4	-	42.8
推定体高(2)	38.9	-	40.6

距骨	4062
L/R	R
全長　GL	24.0
推定体高(1)	-
推定体高(2)	42.2

陰茎骨	4026
L/R	-
全長　GL	87.3
推定体高(1)	-
推定体高(2)	-

凡例　計測位置はDriesch（1976）参照
計測値の単位は全てｍｍ
推定体高(1)は山内（1958）のⅢ式にもとづく（cm）
推定体高(2)は西中川他（2008）の二次回帰式にもとづく（cm）
‐は破損により計測不能